

「脱構築」について語られていること

——ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』ヘブライ語訳序文

ジョゼフ・コーエン、

ラファエル・ザグリ＝オルリ

(訳＝松葉類)

「脱構築」について、まったく定義されていないと言われている。それによれば、「脱構築」は企図がなく、意図もなく作動している。「脱構築」は、西欧的合理性を主導する諸概念を壊すことで満足し、ラディカルな懐疑の態度をとり、ついには相対主義にまで達し、一般化されたニヒリズムへと至る。「脱構築」はもっぱら「無根拠なチェスの一種、つまり、言語活動というある種の洞穴の中に閉じ込められたシニフィアンシニフィアンの組み合わせ組み合わせ」¹に還元される。「脱構築」はロゴスのエコノミーの中には位置づけられず、したがって、言明の源泉を、あらゆる主張に固有のシニフィアンとシニフィエの戦略的論理であるのではないかとつねに疑問視し、また、「立場」と「反対の立場」との隠された前提と正当化を問い質そうとしている。そのことによって「脱構築」はあらゆる「肯定」を再検討し、自分とはといえば、あらゆる言説がひたすら裏返しにされている一種の無差別のなかに引きこもっているような、断固とした疑い深い手続きなのだ。こうして「脱構築」は、哲学史が構築しようと努め、危険を冒して発見しようとしてきたあらゆるものを貶め、否定あるいは否認するような手段にほかならない。区別し、差異化し、省察するという理性の能力をそのたびに蝕みながら、「脱構築」は対立をたんに平準化することを目指し、

¹ Derrida, « La déconstruction et l'autre. Entretien réalisé avec R. Kearney », in *Derrida. L'événement déconstruction, Les Temps Modernes*, Paris, Gallimard, juillet-octobre 2012, no. 669-670, p. 26. [「脱構築と他者」、『現象学のデフォルマシオン』松葉祥一訳、現代企画室、1988年、217-218頁]

判断のあらゆる可能性にシニカルな疑いをはさむ。「脱構築」は、コミュニケーションを促す規範的な対話に関わる立場の数々を織り上げていく可能性の条件を、根拠に基づいて練り上げていくこととはまったく別の仕方^で働く。そうすることでいわば「脱構築」は、理性そのものとそれに再び結びつけられるあらゆるものを深淵の中へと破滅させる。この深淵では、いかなる意味をも適合させることができず、主体はけっして判断力を備えた自律的存在として認められない。このように、つねに、あるいはほとんどつねに、「脱構築」は破壊的な臨検と名付けられている。そしてまた「脱構築」はもっぱらたんなる詭弁であり、実のところ、最後にすべてを捨て、矛盾した命題ゲームにのみつながっているために、提示されるものとは別のもの^につねに賭けているのだと言われる。「脱構築」は、肯定であれ否定であれ、あらゆる命題につねに異議を唱えることで、あらゆる思考の自己肯定ないし自己表出の内的な不可能性を示そうとしているだけだ。このように言われている。

こうして、「脱構築」は何の役に立つのか」という問いが絶えず起こり、それだけで一種の哲学的批判を絶えず構成しているとしても、驚くことはない。実際、「脱構築」がその考案者のたんなる幻影、あるいは、哲学者ジャック・デリダの特異でそのうえ主観的な選択でしかないということを前提するこのような嫌疑を耳にしたことがない者などいるだろうか。たしかに、この哲学者の自伝、政治-歴史的な文脈は重要であるし、否定しがたい重みをもっている——アルジェリア、ユダヤ性、第二次世界大戦、フランス、植民地主義等。だがまた、この自伝-歴史的な文脈化が、それがいかに重要であるとしても、「脱構築」の「最深部」をひとり担うことはできないということをも信じていなければならない。

むしろ、「脱構築」とそこで賭けられているもの^をを考えるためには、たんなる告発さらには中傷としてのほかにほとんど想起されてこなかった問いから近づこうと努めなければならない。その問いは避けがたい重要性を強調しなければならないものなのだ。ニヒリズムの問いである。我々がこの問いを選ぶのは、たん^にあらゆる脱構築に対する保守的な否認ないし伝統的な告発が、もっぱらその問いに要約されたり集約されたりするであろうという理由からではなく、より適切に言えば、「脱構築」はニヒリズムとの深い対立から逃れることがない、言い換えれば、ニヒ

リズムの根本的な問い、つまり合理性から獲得されたとされている根拠に対する問いを伴う説明を迂回することは決してないはずだからである。実際、脱構築はニヒリズムに固有のこの疑いを完全に自らのものとし、それを特異な気がかりに変えることによって、哲学におけるあらゆる根拠についての主張を待ち構える「底なし」を絶えず問い、同時に暴露するであろう。ニヒリズムを至高の価値を減じることのみに還元してしまうことなどなく、デリダはこうした歴史の様相としてニヒリズムに接近する。それは、すべての意味の肯定ないし意味の提題としてのあらゆる立場ないし立場どり〔positionnement〕が、そこではつねにすでにそれらが設立していると主張するものの「底なし」に開かれているところの歴史の様相である。デリダは、ハイデガーによって提示された「根拠律」解釈に従い、そして、大学と教育の可能性の条件を洗練させる中でこの格率が立てられる様相を熟考するのだが²、しかしながら、彼は以下のことをたんに強調することで満足するわけではない。すなわち、創設的意味についての合理的な主張を備える、さらには、それ自身を根拠付けることができる何らかの根拠に訴えることができるあらゆるものを備えることができる、もしくはそう信じている者を、ニヒリズムが絶えず問いただしつづけるのはいかなる点においてかという強調である。さらに明晰に、デリダは以下のようなニヒリズムのラディカルさをよりいっそう強調する。すなわち、ニヒリズムを克服し、解決し、乗り越えるあらゆる可能性もまた同様に、そしてそれがそうした可能性であるがゆえに、その源泉〔source〕ないし資源〔ressource〕をくり抜くことのうちにもたらされるのである。この意味で、デリダは脱構築的な嫌疑をもたらすのだが、我々は、いかなる点で彼がニヒリズムの根本的な問いをラディカル化し、何を付け加えるのかを記しておかなければならない。根拠付けが正当に自分自身を根拠付ける可能性の無化に向かうのみならず、脱構築はこの無化から脱出する可能性を備えるあらゆる源泉ないし資源をくり抜くことをも同時に示しているのである。あたかもデリダが、ニーチェからは（まったく明白なことに、デリダにとって、超越というものは、ひとつの超越であるためには、何らかの価値、規範、

² Derrida, « Le principe de raison et l'idée de l'Université », in *Du droit à la philosophie*, Paris, Galilée, 1990, pp. 472 sq. [「大学の瞳——根拠律と大学の理念」宮崎祐助訳、『哲学への権利 2』、みすず書房、2015年、187頁以下]

判断として構成されるはずがない) あらゆる価値に対して疑うことを引き継ぎ、ハイデガーからは(デリダにとって、問い以前の呼び声、すなわち問いの能力に先立つ召喚は同様に代補的な問いに値する)、根拠と根拠付けにもたらされた問いの契機を、したがって、「根拠律が自らを根拠付けることの不可能性」³を強調することに向かうあらゆる実存的様相を引き継いだかのようである。だが、この二つの借受けから出発して、デリダは「経験の新たな一般構造」⁴に直面することによって、ニーチェとハイデガーを越えてニヒリズムの問いを強調し、先鋭化させる。実際、デリダは、ニヒリズムを克服ないし乗り越える、踏み越えないし自己解体させるというニーチェとハイデガーに固有のモチーフに対する脱構築的なあらゆる問いを自分のものにするのだ。こうして——我々がすでにこの「序文」の始まりから、いくぶん厳密でない仕方でも主張しているように——、あらゆる可能な立場を切り捨て、あらゆる前進した思考や提示された言説を前にして不可能なものを肯定することが、哲学者ジャック・デリダの唯一の動機であるなどということはありません。むしろ、少なくとも以下の複雑化を付け加えることによって、ニヒリズムから脱出する(他の者と同様にニーチェ、ハイデガーの)あらゆる試みを絶えず妨げることが問題なのだ。つまり、ニヒリズムを乗り越える能力を備えたあらゆる企図と試みは、ニヒリズムに固有な定式化ないし再定式化にすぎない、という複雑化である。

³ *Ibid.*, p. 473. [同前、188頁]

⁴ Cf. R. Zagury-Orly, « Khora et l'événement aporétique de la révélation. Pour une nouvelle structure générale de l'expérience » in *Questionner encore*, Paris, Galilée, 2011, pp. 91-109.

⁵ 「実証性」という語が完全に適しているわけではないということを我々は承知している。それは、幅広い存在神学的な特性を負っているからというだけではない。実際、この語は立場を指し示すことができるし、したがって特定の肯定の意図を指し示すことができる。さらに、(ヘーゲルにおいてそうであるように)、主体を従わせることのできる外在性による他律的な命令 [diktat] を意味しうるのだ。しかしながら我々がこの語を選ぶのは、そのもっとも共通する語義を思い出すことで、ある未来の観念へと合図を送るためである。「脱構築」によって「脱構築」に到来するもの、ただし、人間を「救う」「啓示する」あるいは「止揚する」、あるいは少なくとも「贖う」ようにするのはまったくなく、むしろ、いかなる保証された結びつきもあらかじめ与えられた約束も、確証も保証もな

このことは述べられ理解されてもきたことだが、「脱構築」がいかなる点でニヒリズムと対立するのかを再び取り上げて分析することによって、「脱構築」の「実証性」〔*positivité*〕⁵と名付けうるものを考えようと努めねばならない。同じ脈絡において、彼が最初に述べているように、『グラマトロジーについて』が「たんに」⁶、自民族中心主義やロゴス中心主義の単純な批判に還元されるわけではないということ強調するのもまた重要である。一方で、注意深い読者には明白なことであろうが、今日でもまだ思い返す必要があるのは、いかにして、なぜ、何らかの「イデオロギー」の道しるべを立てるためにもっぱら「脱構築」を専有しようとするあらゆる

く、人間に生じるであろうものに従うことの不可能性へと人間を暴露するようにするものの観念に対して合図を送るためなのである。つまり、ある欠如や不在、欠点や不足を示すのではなく、予見可能なものの彼方とすでにそこにあるであろうものの手前の未来という問いへと人間を暴露するような、～なしでという「経験」へと人間を直面させることである。何らかの源泉、根拠の成立もしくは根源の確立によって呼び起こされたり、形をとったりせず到来する未来である。それはこうして、現在において命令する未来の観念、すなわち知を現在化する閉域に還元されることがないようなものに向かって考えることに関わっている。こうして、この「実証性」はあるアポリアにおいて、哲学、哲学史、そしてその未来に関与している。たしかに、哲学史はつねに起源、根拠、源泉の探究や暴露を伴うが、この哲学史のための未来はつねに、同時にそして一度に、哲学史に生ずるものの翻訳不可能性を伴うのだ。それは、哲学をつねに取り巻いてきた諸用語における、そして、その伝統としての未来を同時に考えるために、現前というゆるぎないモチーフへとすでに結びつけられた諸用語における翻訳不可能性である。こうして、同様に哲学はつねにその「脱構築」を伴うということ、すなわち、哲学がつねに——根源、源泉、真理といった——哲学がそこから構成される諸用語の「脱構築」を伴うということ、これらの諸語彙が関与しあう無限の結びつきと同様に、哲学はこの脱構築を伴っているのであることを、脱構築の「実証性」は示そうとするであろう。したがって、その本質が謎を消去し、再専有できないものに再接近し、差異を差異化しないでおくことにつねに属しているような、現前とそこに至る時間的様相との脱構築を、哲学的思考はつねに伴うのである。デリダは以下のように述べている。「差延とは端的により「根源的」だが、それはもはや「根源」や「根拠」と呼ばれることができない。これらの概念は本質的に存在神学の歴史に属しており、言い換えると差異の消去として働く体系に属しているのだ」(Derrida, *De la grammatologie*, Paris, Minuit, 1967, p. 38. [『グラマトロジーについて 上』足立和浩訳、現代思潮新社、1995年、54-55頁])。)

⁶ Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 11. [『グラマトロジーについて 上』、15-16頁]

る読解に対して、「脱構築」が汲みつくしえない疑いをはさむのかということだ。むしろ我々が強調するように、「脱構築」はそれがいかなるものであろうとも、あらゆる立場に対してあらゆる問いを問い、また留保しようとしているのだ。さらに付け加えるなら、この序文が論じるように、1967年の主著〔『グラマトロジーについて』〕は、必ずしもそれらを名付けてはいないものの、デリダの著作と切り離すことができなくなるような「主題」をすでに作動させている。「アポリア」、「コーラ」、「正義」、「無条件性」、「未来」、「亡霊性〔spectralité〕」等である。さらにあらゆる「問題」——デリダの思想を働かせることになる、あらゆる他の「主題系」と同じく「脱構築」に属する「問題」——を粗描している。赦しと偽誓〔parjure〕、贈与とその固有のエコノミー、歓待と越境、主権、動物性、友愛、秘密、等である。

『グラマトロジーについて』は「エクリチュールの学」に通じている。デリダにとって、この学はその起源や根拠についての説明に閉じこもっていることはできないし、シニフィエとシニフィアンとの関係の構造による規定を受けることもできない。もはや現前や現前の現在化というパラメータによってではなく、「原-痕跡〔archi-trace〕」として理解された「一般エクリチュール概念」に開かれるために、シニフィエとシニフィアンとを介する動性を代補することによって、エクリチュールの形而上学的根拠づけを超えることがむしろ問題となるであろう。後にこの〔「原-痕跡」という〕語に再び立ち戻る機会があるだろう。だが今から強調しておくが、この「グラマトロジー」は「その方法序説を書くことも、自らの領野の諸限界を記述することも」⁷できない。なぜならそれは——デリダが本書の始めから強調を込めて示すように——、意味の表象的機能にエクリチュールを囲い込み、境界付ける可能性は、エクリチュール自身をもつばら還元させ、平準化させ、くり抜かせるからである。エクリチュールのこの還元、この平準化、このくり抜きは、だからといってその終わり=目的を意味しているわけではない。じつにはっきりと「脱構築」の未来へと通じている箇所においてデリダが強調するように、いかにしてエクリチュールが「歴史-形而上学の時代によって規定され」⁸、したがって、いかに

⁷ *Ibid.*, p. 14. [同前、17-18頁]

してつねにすでもつばら「自らの脱臼を生じ、自らの諸限界を告発する」⁹のかを示し、明らかにすることが問題なのだ。『グラマトロジーについて』はけっして歴史-形而上学的な固有の規定にたんに留まるわけではなく、いかにして、なぜ、エクリチュールが剰余と別の仕方とによってつねに影響を受けるのかを示し、明らかにする。こうしてエクリチュールは、現在にけっして還元されないであろう来たるべきもの〔*à-venir*〕、現前の秩序においてけっして繁榮しないであろう来たるべきもの、デリダが他の数々のものの中で「差延」の名を、あるいはさらに、レヴィナスからインスピレーションを受けて「痕跡」の名を与えることになるであろう来たるべきものによって影響されている。エクリチュールのあらゆる現在化の向こうの、エクリチュールのあらゆる「時代的な〔*épocal*〕」規定の向こうの「エクリチュールの来たるべきもの」というこの「未来」〔という概念〕によって、いかなる点で、エクリチュールが終わりに到達したとデリダが解することがけっしてないのかがわかる。他方で、形而上学の終わりに到達したと解することもけっしてない。さらには、思考の「第二の始まり」、あらゆる「時代性〔*épocalité*〕」の外に考えられるような第二の始まりのうちに飛び出すに至ったのだと解することもない。こうしてヘーゲルとハイデガーとから遠ざかりながら、現前の優位によって支配された歴史-形而上学的時代の閉域を別の仕方とで考えることの可能性へとデリダは直面している。この閉域は諸時代の終わりとしては考えられないし、「時代性」の論理の終わりを示しうるのでもなく、さらに言えば、思考の「第二の始まり」への何らかの呼び声になるのでもなければ、また、定められた形而上学の時代の向こうにある「〈現存在〉としての人間の要求」になるわけでもない。デリダにとって時代の「閉域を垣間見ること」¹⁰とは、一度にそして同時に、つまり決定不可能な仕方とで、未来をおそらく形をとることのできるものとして考えることの可能性に開かれていることを意味している。別の時代の到来の内にであれ、「時代性」の論理そのものの乗り越えの内にであれ、さらには「まったく他者」としてないし「時代性」の永続やその乗り越えとは「まったく別の仕方と」してであれ、未来がそのように形をと

⁸ *Ibidem.* 〔同前、18頁〕

⁹ *Ibidem.* 〔同前〕

¹⁰ *Ibidem.* 〔同前〕

りうると考えることの可能性に開かれているのだ。我々はここで実に明白に、デリダが代補において言おうとすることに触れている。つねにそこから未来が与えられるような場の、あらゆる規定を超える「決定不可能性」が問題なのだ。〔『グラマトロジーについて』の〕「銘句」の終わりの箇所を長めに引用しよう。「今日、学とエクリチュールとについてのもっとも多様な諸概念を介して志向されうるあらゆるものの統一性は、原理的に、多かれ少なかれ内密に、だがつねに、我々がその閉域を垣間見ることしかない、歴史-形而上学的時代によって規定されている。我々は最後まで述べてはいない。学の観念とエクリチュールの観念——したがって同様にエクリチュールの学の観念——は我々にとって、記号について（もっとあとで記号については説明するのだが）のある概念とパロールとエクリチュールの関係についてのある概念とがすでに割り当てられた世界の内側においてでなければもより意味を持たない。パロールとエクリチュールの関係は、その特権にもかかわらず、その必要性にもかかわらず、そしてまた特に西欧において——今日西欧では自らを脱白させ、諸限界を自ら告発することができるという点でとくに西欧において——、その関係が数千年間で開いてきた領野にもかかわらず、この関係はじつに限定された関係である。おそらくいまだに仮にエクリチュールと呼ばれるものをめぐる忍耐強い省察と厳密な問いとが、エクリチュールの学の手前に留まったり何らかの蒙昧主義的な反応によって早急にエクリチュールの学を追い払うことなどなく、反対にこの学の実証性を可能な限り発展させるのだ。そのことによってこの省察と問いとは、現在に対して知の閉域の向こうで予告される世界、不可避的に到来するはずの世界に対する、忠実で挑戦的な思考の彷徨なのである。未来は絶対に危険なものとしてしか予期されえない。未来とは構成された正常さと絶対的に切り離されたものであり、したがって、一種の奇怪さとしてしか予告されえず、現前しえないのである。来たるべきそうした世界のために、そしてその世界で記号、パロールそしてエクリチュールの価値を脅かさせるであろうもののために、我々の次の未来をここで導くもののためには、いまだに銘句などないのである」¹¹。

このようにして、けっして与えられることのない未来〔avenir〕、「将来〔future〕」に還元されえない未来、言い換えればけっして現在にも、さらには「現在-将来

¹¹ *Ibidem.* 〔同前、18-19頁〕

〔présent-future〕にもならないような未来に対して思考は測られるのだ。もっと言えば、未来は現在ないし現在化を不可能にする。そのようにして、未来はある現在に受肉するのを拒むのだ。だからこそ、デリダはつねに現前の秩序と軌道に対する未来の異質性を強調する。したがって、未来のつねに来たるべき未来をつねに強調するのだ。ハイデガーが諸前提を跡付けた「偉大なるギリシャの始まり」の彼方に「別の始まり」が啓示される可能性にさえ、未来は閉じこもってはいない。むしろ、未来はすでに現在も現前も欠いたままであり、「現在-将来」として、もっと言えば、将来の彼方の出来事として与えられるわけではないということは、デリダにとって以下のことを意味している。すなわち、まさに与えることの論理としての時代的論理の解体へと、したがってこれら二つの形而上学的モチーフの共属の解体へと脱構築がつねに関与しているということだ。どういうことだろうか。未来は将来への還元を超えてそれ自身において与えられはしないし、たんに将来とは別のものとして与えられはしないであろう。それとしての未来 [l'avenir *comme tel*]、あるいは、再びこの語を用いるなら、未来の「それとして」を隠匿することはつねにすでに始まっていたのだろう¹²。それは、何よりも「脱構築」は反復に気をつけているということだ。なぜなら反復とはつねに、ある規定、したがっていわばある現在化に取りつかれている〔habité〕本質をもつ構造にほかならないからである。まさに思想史における時代の連なりとしての、「ギリシャの始まり」における「別の始まり」は結局、形而上学の伝統の主たる特徴——反復という特徴——の使い古された永続化にほかならない。たしかに、ほかならぬデリダこそ、ハイデガーが反復の思想家とはみなされないということを理解していた。だが、彼はまた、いかにして、なぜ、ハイデガーのあらゆる規定に古典的かつ伝統的なこの重厚なモチーフが取りつき〔habiter〕、憑りついて〔hanter〕いたのかを暴露した。「省慮」、「諸根源の探求」、「人間の問い」、「思考の場の再転換」、「それとしての現れ」そして「転回」¹³の規定でさえそうなのだ。この最後の「概念」について少し追究しよう。

「転回」とは何なのか。それは次のものにほかならない。すなわち、そこから時代が思考の別の到来へと変化し、変位するところの様相である。それはハイデガー

¹² *Ibid.*, p. 69. [同前、98-99頁]

が不断に考え続けた別の到来、ヘルダーリンの有名な一節を思い出すなら、思考の「救い」としての到来である¹⁴。さてデリダが示すのは、いかにして、必ずしも別の時代の可能性ではなく、相続人不在のままである基礎的な土台〔fond〕を反復する可能性にこの挙措がただ開かれているのか、である。この土台は、歴史が人間に失わせた当のものを取り戻すという人間に固有の解放が位置付けられる基礎的な土台である。つまり、いかにして、なぜ反復の構造が、未踏で未思考の根源的な手前へと回帰しようとして、プラトンからハイデガーに至るまで、ニヒリズムの運命にある形而上学と技術とから脱出し、「諸々の時代」において構造化された土台をもつ存在神学を乗り越えようとするあらゆる試みに取りつき、憑りついていたのかを彼は示したのだ。ここにおいて疑いなく、じつに慎重にデリダはハイデガーの「解体〔Destruction〕」から「脱構築」を区別し、まったく別の資料体〔corpus〕におけるハイデガーの挙措の資源、帰結、衝撃、問いを汲みつくそうとする。この資料体とはつまり、ニーチェの資料体、さらに言えば、ある特定のニーチェの資料

¹³ いかにして、なぜ、「存在の思考」が、つまり、「別の始まり」、「第二の始まり」の思考を要求する可能性によって、形而上学を抜け出すことを何よりも志向する思考が、自らが抜け出そうとする当のものにつかまえられ、完全に捕らえられたままであるのかということを示そうとする箇所は『グラマトロジーについて』において数多くある。デリダによれば、あるニーチェのみが——ハイデガーのニーチェ解釈とは反対に——、形而上学を乗り越えるという主張に対する疑念として、差延の力をおそらく思考していたのであろう。「これこそがおそらく、ニーチェが書こうとし、ハイデガーの読みに抗うものである。能動的な動きにおける差異——それは、論じつくしてはいないが、差延概念において考えられているものだ——とは単に形而上学に先んじるだけでなく、存在の思考からはみ出すものなのだ。たとえ存在の思考が形而上学を乗り越え、形而上学がその思考の閉域の中にあると考えたとしても、それは形而上学が論じていることにほかならない」。Cf. Derrida, *De la grammatologie, op. cit.*, p. 206 sq. [『グラマトロジーについて』、5頁]

¹⁴ 周知のとおり、ハイデガーは『技術の問い』において、他の箇所と同様に、ニヒリズムの増殖、すなわち「危機」と、ニヒリズムに「救い」の現れを見る可能性とを関係づけ、結びつけている。この「救い」、「救いの力」はその乗り越えないし超越の中で時代を反転させ、転回させるものであり、そこにまったく「別の始まり」が関わりうるのである。その導きとなるヘルダーリンの一節には、確かにこうある。「しかし、危険があるところ、救いの力もまた育つ……」。

体だ。ハイデガーの考えとは反対に、ニーチェは形而上学のなかに閉じ込められ、捉えられ、はめこまれ、捕らえられていることはできず、エクリチュールによって、「ロゴスに対する、そして、真理と根本的なシニフィエとに関連した概念とに対する、依存ないし迂回から、シニフィアンを解放することに寄与するのだ」¹⁵。したがって、ニーチェは「彼の書いたもの」にもっとも近い形で読まれる¹⁶。ニーチェが書いたものとは何か。ここでデリダが提起する問いには即座に答えられる。ニーチェの思考の「辛辣さ」とハイデガーの思考の「素朴さ」とを同時に示す答えである。「彼〔ニーチェ〕が書いたのは、エクリチュールが——まずは彼自身のエクリチュールが——、根本的にロゴスと真理とに従属するものではないということだ」¹⁷。つまり第一に、ニーチェの思考はおそらく、ロゴスと真理への固有に形而上学的な従属を反復しない力と能力とをもつある思考、あるエクリチュールに開かれている。そして第二に、ハイデガーの思考は、「存在」と「真理」、「ロゴス」、「現前」の間の揺るぎない共属を措定しつつ、自らが関わっていると信じているもの、すなわち「解体」によって何も揺るがさないという点で、「素朴」なままなのである。ハイデガーとは反対に、形而上学から脱するかどうか、形而上学に留まるか捉えられているか、その彼方で「転回」を実現させるかおのずから転回を展開させるか、あたかもニーチェにとってはそれらは問いでも問題でもなかったかのようだ。形而上学から脱するかそこに留まるか、それはもっぱらハイデガーの関心事であったのだろう。ニーチェにとって、またはニーチェを読むデリダにとって——このことは『グラマトロジーについて』の冒頭数ページから明晰判明に記されている——、問いはさらに深い。その問いの要点は、「存在」と「真理」がその根本的なシニフィエとならないエクリチュールを解放することにある。それはしたがって、ニヒリズムに不断に対立するエクリチュールを解放することなのだ。そこから、以下の問い、すなわち哲学的なあらゆるエクリチュールに不断に伴う問いが生じてくる。それは、ニヒリズムはつねに、形而上学から脱する努力のうちに展開される反復の構造によってあらゆる思考を捉えるのかという問いである。この境界外にニヒリズムを追

¹⁵ Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., pp. 31-32. [『グラマトロジーについて 上』、46-47頁]

¹⁶ *Ibid.*, p. 33. [同前、48頁]

¹⁷ *Ibidem.* [同前]

いつめる努力において、プラトン以来「存在の思考」に至るまでの思考は、ニヒリズムを再来させ、その再来をその第一のもっとも近しい可能性として認めてきたのではなかったか。さて——おそらくここでデリダが携わる哲学の伝統のあらゆる読解が働いている——問いは以下のようなものになる。いまこそまさに、ニヒリズムから逃れる可能性を描き出すあらゆるモチーフへの疑念をつねにいたるところで差しはさむことで、ニヒリズムと対決する時ではないだろうか。かくして、ニヒリズムから人間を解放させるという主張を備えた哲学的諸概念の飽くことない不断の反復に関して、容赦ない疑念をはさませることが重要なのだ。

この疑いはデリダによって、そして今しがた示したニーチェの内省において、ある特異な強い挙措によって行使される。この挙措が示すのは、いかにして、あらゆる立場とそれら各々の立場が特権化しようと信じているものが、要求されていようがいまいが、その固有の条件から構成される可能性からのみ意味を引き出し、結果として、その諸立場が思考するものないし思考すると主張するものからすでに還元されているのかということである。このあらゆる立場と各々の立場が特権化しようと信じているものとは、たとえば、志向性や非-志向性であり、〈精神〉の生成の絶対的な現前や超越論的／現象学的主体の「後退」であり、同一性や差異であり、場への根付きや非-場所への追放であり、（強かれ弱かれ）信仰や（ラディカルであれ不可知論的であれ）無神論であり、主権や隷従であり、啓示の光や秘密の闇であり、現前や不在であり、まったきパロールや控えめな沈黙、等々である。あらゆる立場は、いかに差異化されているにせよ——そしてデリダはいつも、頁から頁にわたって、本から本にわたって、その代理できない特異性を伴い、展開し、開陳し、強調しようと努めているのだが——、実のところ、ある基礎、土台あるいは構えが与えられる可能性、そこに与えられるものを専有する可能性、そこで主張されることへの同意を明記する可能性、そこで述べられることだけでなく、それが前提し予見するあらゆることへもすでに賛意を示すような同意を明記する可能性の要求をなすものなのだ。即座に立場は可能性の揺さぶり〔solicitation〕となるだろうし、言い換えれば、デリダによれば、そこで主張されることの解体となるであろう。立場が自らの意味、自らの方向づけ、自らの能力、自らの決定を引き出すところの可能性の条件は、一度にそして同時に、それ自身として主張されることの不可能性

を示すであろう。実際、立場は還元され、台無しにされるほかないであろう。この——その不可能性を直ちに示すような可能性の¹⁸——〈法〉こそが、デリダが存在神学、形而上学、哲学の伝統を揺さぶりながら展開したものである。ここから、『グラマトロジーについて』において、「いかなる条件においてグラマトロジーは可能か」と示される際に、この〈法〉をそこへと書き込む際の強調点がある。「その根本的な条件はたしかにロゴス中心主義の揺さぶりである。だが、この可能性の条件は不可能性の条件へと方向転換するのだ」¹⁹。言い換えれば、可能なものを備え、その実現可能性の条件をもつあらゆる句、語、言説は、直ちにその固有の自己-違背によって働きかけられるのだ。

そうだとすれば、不可能なものへのこの欲望へと身を委ねて何になろう。あらゆる可能な立場が構造的な不可能性のうちに自らを裏返し、裏切り、反転し、自己放棄することしかせず、したがって、維持しえず、支持しえないもの、いまだその名に値しないものだと判明する場合に。「脱構築」は何を思考させうるのであろうか。

いくぶん断定的で図式的な仕方での問いを提起することで、我々は、哲学をすることが利益によって動機づけられるか、もしくは生産性の論理に従うということを示すつもりはない。はるか昔から、哲学は利益以前に考えられていたし、収益のエコノミーに従うのとはまったく別の仕方で行われていた。したがって、我々はこの問いを提起することで、収益に関わり、そのために用いられる以前の思考が望

¹⁸ *Ibid.*, p. 109. [同前、153頁]

¹⁹ *Ibidem.* [同前] ここで、この一節と20年以上後に『死と与える』において見出される一節との近さを強調しよう。贈与と与えることの論理を脱構築することを問う一節である。「ここに考えるべく与えたい不可能なことがあります。すなわち、これらの（誰か「ある者」が何らかの「物」を誰か「別の者」へと与えるような）贈与の可能性の諸条件は同時に、贈与の不可能性の諸条件を指し示しているということです。これを、我々は前もって別様に翻訳しうるでしょう。すなわち、これらの可能性の条件は中止、消滅、解体を規定し、あるいは産み出すのだ、と」(Derrida, *Donner le temps*, Paris, Galilée, 1991, p. 24. [「時間を——与える」高橋允昭訳、『他者の言語——デリダの日本講演』、法政大学出版局、1989年、72-73頁に該当箇所]。)

むものを知るべきだと述べるつもりはない。まったく反対に、この問いを提起することで、我々の企図は「脱構築」が思考すべく与えるもの、「脱構築」が思考に供するもの、「脱構築」が思考をそこへと導くものを了解させることにある。「脱構築」が思考をもたらすのはいかなる未来に向けてであるか。いかなる「実証性」が思考に対して身を潜めているのであろうか。不可能なものへのこの欲望が考えるべく与えうるものとは何か。「脱構築」が何の役に立つのか、したがってこの問いは同じ「脱構築」へと書き込まれた要求として解されるべきだ。不可能なものを、たんに可能なものないし可能性の逆のものとしてではなく、可能なものに対してまったく別の関係がおそらく開かれているところで考えることの要求として、この問いは解されるべきなのである。まったく別のもの、それはまったく別の仕方で実証的なのだ。

この意味で、「脱構築」は何の役に立つのかという問いは要するに、「脱構築」という動きにおいて与えられるものは何か、そして哲学史においてのみならず、我々の時代において、そして、我々の未来に面して、「脱構築」が関わるのはいかなる責任なのか、ということである。「脱構築」は——しかし、しばらくの間だけ [*pour un certain temps seulement*] —— 「脱構築」と呼ばれるものは何か」として解されうるのである。

しばらくの間だけ。ここでの我々の問いは、ハイデガーの思考にもっともよく用いられたモチーフを再び取り上げることで、定式化される——それは責任、応答の形での参与、呼び声、与えることといったモチーフである。ちょうどその定式化において、我々の問いは哲学史に固有の問いを再び投げかけるハイデガー的な仕方を思い起こさせる。とはいえ、「与えること」、「呼び声」、「呼び声を与えること」、あるいは「与えることの呼び声」といったあらゆる存在の命名、存在規定によって示唆されている不断のアポリアを、「存在の思考」とは別のところで示すことで、いかにして、なぜこの問いが自ら脱構築されるのかにこの問いはまた関わっているはずである。そして、ハイデガー的な言い回しとなお混同されるのは、この問いが何よりもまず、根気よく「基礎的存在論」と「存在の思考」のあらゆる構築物を揺さぶることになるからである。そしてこの揺さぶりは、この構築物をもっとも確実

でもっともひそかな明証性において揺るがすために、その固有のラディカルさ（主体と超越論的経験の哲学の「乗り越え」、または「生ける現前」という動きからの切断、「保存」と「保護」としての真理という動きからの切断、「隠蔽」と「暴露」の二重性としての現前を現前させる動きからの切断）においてこの構築物を忠実に反復するのである²⁰。「基礎的存在論」、すなわち「存在の思考」のもっとも確実でもっともひそかな明証性を揺るがすことは、デリダにとってある義務を示していた。それは、思考の同じ飛躍のこうした二対をなすものを組織するあらゆる主題系を脱構築する義務である。それはたとえば、呼び声という主題系である。実際、脱構築はたんに呼び声の源泉——呼びかけるもの、我々が呼びかけられるもの、我々が呼びかけるもの——のみならず、もっとも深い仕方では、思考をして呼び声を聞かしめるこの固執と傾向との源泉を問いただす義務があるのだ。起源に向かう根源的呼び声へと思考を帰属させ、思考の超越論的で批判的で能力的な位置づけに先行するこの優位をデリダは不断に問いただしたのだ。そこで、デリダの問いをさらにエスカレートさせてみよう。平然と不可分な形で複雑化されたこの動き、ハイデガーにおいて、思考、言語、呼び声、所属、対応、一致、言語との間に幾度も見出されるこの動きが構成され、働きかけられるのはいかなる場からであろうか。ここでデリダに従って、この問いをさらに前方へと賭けてみよう。人間を真理への忠実な応答者、真理への敬虔な対応者にする根源的な言語への所属と人間の思考がいささかも結びつけられたり、結び合わされたりすることがない場合、人間はどうなるのだろうか。「存在の真理」へ応答させる根源的な呼び声に応じて、その思考が展開することがけっしてないなら、人間はどうなるのだろうか。その思考と言語が何にも属していないのではなく、存在と真理との戯れにおいて規定されうるものには何にも属していないのなら、人間はどうなるのだろうか。実際ここで、こうした脱構築的な問いの軌道において、より「実証的」なものは何も描かれることはない。人間の未来に対しては、この未来に属さないような、あるいはこの未来が属するような言語以上に「実証的」なものはない。「どこにも属していない言語以上に」「実証的」なものはないのである²¹。

²⁰ 以下を参照。Derrida, *De la grammatologie, op. cit.*, p. 107sq. [『グラマトロジーについて 上』、147-148頁]

周知のように、デリダが「脱構築」という語を定義することはごく稀であった。その思想において、用いられるあらゆる語彙を明確に固定し、規定し、カテゴライズするという問題にすべてが送り返されるなかで、実際いかにして何らかの定義を課することができるだろうか。あらゆる「与件」を、その固有のアポリアという試金石に曝すことで、「脱構築」は「定義づける」可能性そのものを不断に緊張させることに執心する²²。この意味で「脱構築」は、すべての「与件」を、したがってすべての語彙を、それらを「定義づける」可能性そのものがその固有の能力を失う経験²³へと従属させ曝すのだ。こうして、この経験によって、以下の問いがたゆまず適用されることで、可能性は自分自身へと曝される。すなわち、いかなる場から、そしていかなる〈法〉の名において、可能性は可能性として生じるのか、という問いだ。

可能性の只中でその固有の動きに接した問いの力、目覚め、射程は——デリダは複数のテキストにおいて指摘しているが——、「アポリアの経験」として考えられている。その要点を記しておくと、すなわち、あらゆる可能性の只中において、「ある端から端まで不可分な線によって、異なる概念を対立させるような経験とは別の経験」²⁴が明らかになるのだ。それは、乗り越えられない究極の限界を暴露するはずの別の経験、言い換えれば、可能性がその固有の不可能性とぶつかる契機、あるいは自分自身とは別のものによって不断に働きかけられ、取りつかれ、寄生された自分自身とぶつかる契機である。だが、可能性に抗して、思考に抗して、伝統の書き手に抗して考えることが問題なのではない。そうではなくむしろ、可能なものを書き手の同じエクリチュールに接して思考する中で、思考されるものの以前に、

²¹ Cf. Derrida, *Schibboleth. Pour Paul Celan*, Paris, Galilée, 1986. [『シボレット——パウル・ツェランのために』 飯吉光夫・小林康夫・守中高明訳、岩波書店、1990年]

²² Derrida, *Apories*, Paris, Galilée, 1996, pp. 25 sq. [『アポリア』 港道隆訳、人文書院、2000年、23頁以下]

²³ *Ibid.*, p. 35. [『アポリア』、37頁] Cf. aussi, R. Zagury-Orly, « Khora et l'événement aporétique de la révélation. Pour une nouvelle structure générale de l'expérience » in *Questionner encore, op. cit.*, pp. 91-109.

²⁴ *Ibidem.* [同前]

そしてその彼方で思考することが問題なのだ²⁵。可能性は自分自身のみならず、同じ動きの中で、可能性が隠蔽するもの、可能性が偽るもの、その可能性自身において賭けるものそして賭けられるものにも直面するであろう。したがって、可能性はその還元不可能な有限性によって測られるのだ。それは、「受動性の中に根付いた、形而上学が感覚一般と呼ぶ」²⁶有限性とは別の有限性である。以上が「アポリアの経験」だ。可能性が語られ主張されることにもはや甘んじず、とはいえ、その「根源」の問いないし「源泉」の問いを自ら裏返しながら、還元不可能なその限界の内に直ちに投企される瞬間である。しかも、この投企は、この限界につなぎとめられる可能性を欠いたままなされる。なぜなら、この問いに接して展開されるもの——我々が先ほど、還元不可能で乗り越えられない限界だと述べたもの——を、もはや「起源」ないし「源泉」、「条件」ないし「出来」として理解することはできないからだ。限界において展開されるもの、それはまさに「起源なき差延の産出という能動的な

²⁵ デリダとヘーゲルやカント、フッサールとの関係は、単なる対立関係に還元されることがけっしてないということを再び述べておかなければならない。これらの思考におけるすべてのものが再作動するところの、そして、この同じ読み直しによってまったく別の軸道を見出すことができるような再開が、むしろ問題となるのだ。この点はおそらくヘーゲルの例を扱う以下の一節によって明らかとなるであろう。「これについて我々はヘーゲルないしヘーゲルのテキストの読み直しを終えたということではできません。ある仕方では、この点について自分の考えを説明しようと試みているにほかなりません。実際、ヘーゲルのテキストには必然的に亀裂が入っているということを私は信じています。ヘーゲルのテキストがそ自らの表象の循環的閉域を超えており、それとは異なるものであると信じているのです。彼のテキストは哲学的命題の内容に還元されず、必然的に力強いエクリチュールの働き、エクリチュールの残滓を産み出します。ヘーゲルのテキストが哲学的内容において維持しようとする奇妙な関係を再び問いただし、自らの言わんとすることを超えさせ、自己への同一性の外で迂回し、裏返し、反復させる動きをこのテキストについて再び問いたださなければならないのです」。Derrida, *Positions*, Paris, Minuit, 1972, pp. 103-104. [『ポジション』高橋允昭訳、青土社、2000年、115-116頁] ここで、「脱構築」とヘーゲルの思弁的弁証法との関係に関するデリダの講義については、以下の論考を参照できよう。J. Cohen, *Le sacrifice de Hegel*, Paris, Galilée, 2009.

²⁶ J. Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 98. [『グラマトロジーについて 上』、138頁] この意味でこそデリダによる次の一節「差延は有限性とは別のものでもある」を理解しなければならないであろう。

動き」²⁷であり、言い換えると、問われるものの「真理」が位置づけられる根拠を限界がけっして構成しはしない回収不可能な動性である。

こうして、「アポリアの経験」は「経験のアポリア」を意味する。『グラマトロジーについて』の初めから、デリダは経験概念との隔たりを示し、この概念をその固有の可能性と意味作用の能力が汲みつくされた状態へと——しかも、まったく別の概念として——従わせるように要求するだろう。数ある箇所から一つを引こう。「『経験』はつねに現前への関係を指示している。この関係が意識という形を取ろうが取るまいがそうなのだ。脱構築によってその最後の土台において経験概念に達する以前に、そして達するために、言説がここでそれに対して強制されているようなこの種の歪曲と緊張とに従って、経験概念の資源を汲みつくすべきなのだ」²⁸。これが「脱構築」によってもたらされた要求である。すなわち、哲学から出てきたあらゆる概念を可能にする当のものを、哲学の還元不可能な限界を示すために永遠に危険に曝しつづけるという要求である。それは、この限界において停止し、その定義の意味と本質を示すためではなく、むしろ不断にその還元不可能性を掘り下げ、したがって、それを一つの固有の定義に固定することの不可能性をラディカル化するためなのである。こうして、あたかも経験概念が展開するのは、その土台において自分を条件づけるものではなく、満足できない絶え間なさと無限な掘り下げとによってその土台を、つねに沈み込む底なしへと変えるものであるかのようなのである。したがって、その不可能化〔*impossibilisation*〕の動きへとこの概念自身が持ち去られていくかのようなのである。こうして、この観点から、不可能な定義は奇妙な仕方で定義可能性へとはめこまれ、可能性の諸条件の探求へと適合させられる。だからこそ「脱構築」は、観念と概念がそれとしてあることの不可能性、哲学者が用いる語と語彙とがその資格においてあることの不可能性を示しつづける。脱構築は土台を暴露すると同時に、この土台によって、いかなる点でこの土台が別の仕方で代補され続け、終わることなく臨検され、つねにすでにそれ自身と異なるのかを示すべく賭

²⁷ Derrida, « La Différance », in *Marges de la philosophie*, Paris, Minuit, 1972, p. 12. [「差延」、『哲学の余白 上』高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2008年、48頁]

²⁸ Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 89. [『グラマトロジーについて 上』、121頁]

けるのである。結果として、「脱構築」の本質など存在しない。「[...]脱構築(とは)たんにそれ自身としてあることにおいてその名ないし現れを専有されるがままにならないものであるのみならず、それ自身としてあること一般の権威、その本質における事物の現前の権威を脅かすものでもあるのだ」²⁹。

だが、本質なき思考がどこに向かって行けるといえるのか。つねにすでに飛び出していたのだから、いつから始まっていたかさえわからない動きに、問いはある仕方では遅れているのであろう。さて、デリダは『グラマトロジーについて』においてさらに強調する。「もちろん、これらの諸観念を再び放棄することが問題なのではない。今日では少なくとも、我々にとってそれらは必要で、それら無しでは何も考えられないのだ」³⁰。「脱構築」は哲学的伝統から受け継いだ語、語彙、概念、観念を無理やり放棄することを望むわけではない。「脱構築」は無限定にその底そのものを掘り下げ、そして、いかなる点で、この根拠はそれ自身でありながらもそれ自身ではないのかを明らかにすることで、この語彙の底に横たわるものを考えようとするのだ。あらゆる概念の底の底で、その概念がそこに含まれていないものによってつねにすでに取りつかれ、また憑りつかれ、無条件に揺さぶられているということが見えるように、脱構築は作用するのだ。確かにそれは底であるが、同時にそして一度に、底なき底なのだ。だからこそ「脱構築」は外から哲学的伝統の語と語彙とに働きかけるわけではない。反対に、これらの語、語彙、概念、観念の中心そのものに取りつくことでしか、その挙措と快挙はもたらされえず、なされなかったのである。デリダは『グラマトロジーについて』の初めから、そのことをこう示している。「脱構築の動きは構造を外から揺さぶるのではない。その動きはそれらの構造に取りつくことによってしか可能でも実効的でもないし、照準を定めることができない。それは、ある仕方でそうして取りつくことによってであり、つねに取りついているからであり、さらに言えばそのことに気づいていないときに可能となるのである。脱構築は必ず内側から作動する、つまり、転覆のために戦略的で経済的なあ

²⁹ Derrida, « La Différance », in *Marges de la philosophie*, op. cit., p. 27. [「差延」、『哲学の余白 上』、73頁]

³⁰ Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 25. [『グラマトロジーについて 上』、36頁]

らゆる手段を古き構造に借りる、それも構造的に借りるのだが、言葉を換えれば、諸要素と諸元素とをその構造から切り離すことなどできないのだが、脱構築の企図はつねにある仕方ですれ自身の働きによってもたらされるのである」³¹。

そうだとすれば、「脱構築」は、未規定化し〔*indéfinir*〕、脱構築しようと努める対象を断念することはできないであろう。『グラマトロジーについて』において、つねにデリダはそのことを示している。「我々にとって不可欠なこれらの概念を、それらが一部をなす遺産を今日揺るがすためにこそ、断念すべきではない。閉域の内側で、間接的かつねに危険なある動きによって、それが脱構築するものの手前に舞い戻るリスクを冒すこの動きによって、慎重で細密な言説の批判的諸概念を吟味し、それらの有効性の諸条件と環境と諸限界とを示し、それら自身によって解体されうる機関への自らの所属を厳格に指し示さなければならない。そして同時に、閉域の外の未だに名付けえぬ微光を垣間見させるような断層を指し示さねばならないのだ」³²。したがって、いかにして、なぜ、まさに語と語彙そのもの、構造と観念そのものが自らを脱構築するのかを提示することで、「脱構築」は作用するのである。「脱構築」は、無条件の未規定化という不断の動きにおいて、つねにすでに獲得され〔*pris*〕、心を奪われた〔*épris*〕ものを明らかにするのだ。

以上のことは実際、「脱構築」の驚くべき「戦略」なのだ。「脱構築」がいかにして実現されるかを述べる以前に、「脱構築」は「何かを産み出し」、「産み出される」のである。さて、「脱構築」は何を「産み出し」、いかに「産み出される」のであろうか。「脱構築」はまさに自身が脱構築した語、語彙、概念、観念を「産み出す」。そして、脱構築が可能性の条件ではなく、場合によっては、可能な別の痕跡であるようなまったく別の仕方の、多数のそして多数化された痕跡として産み出されるのである。この痕跡は、『グラマトロジーについて』で示されるエクリチュールの時代においても、デリダがやむを得ず「効果」³³と呼ぶものである。こうして、「脱構築」はけっして脱構築されるものの遺産を断念することがない——ある意味

³¹ *Ibid.*, p. 39. [同前、55頁]

³² *Ibid.*, p. 25. [同前、36頁]

で、「脱構築」とはこの遺産そのものなのだ。そして「脱構築」は別の未来、さらに言えば思考不可能な別の未来に向かって、この遺産を関与させ、導くのだ。こうして、「脱構築」は自らを別の思考だと見なすわけではない。「脱構築」は他者に由来するが、つねに「同 [même]」を別の思考不可能なもの、別の決定不可能なものに向かって追放する。それゆえ、性急な論者がそう示唆してきたように、「脱構築の脱構築」をなし——あたかも「脱構築」がヘーゲルの弁証法と混同されているかのように——、デリダの挙措が自らを産み出しながら産み出すものを解体するに至ったなどと主張するのは場違いであり、哲学的に素朴である。たんに「脱構築」がまさにすでに無条件の反復の運動へと導かれているからのみならず、同様に、そしてとりわけ、「脱構築」が産み出されながら産み出すものは、「脱構築」そのもの、「脱構築」でありうるもの、いずれ「脱構築」となるものの不可能な規定であるからである。「脱構築」はたんに、決定不可能ないし予見不可能なもの、不可能ないし無条件的なものとして産み出し、産み出されるのではなく、決定不可能の彼方の決定不可能なもの、予見不可能の彼方の予見不可能なもの、不可能の向こうの不可能なもの、そしてこの限りなさとして産み出し産み出されるのである。実際、デリダはこのことを幾度となく述べ書いてきたにもかかわらず、決定不可能なもの、予見不可能なもの、不可能なもの、無条件なものを突き止め、あるいは強調することで、たんなる「知の彼方」を示してきたにすぎないとあまりにもたびたび解釈されてきた。「知、人間-死学、生物学あるいは死の哲学の彼方で、よりラディカルで根源的で基礎的な思考への移行を正当化することは私の課題ではないということ、あなた方にうまく説得できていることを期待する」³⁴。このほとんど口語的でいくぶん絶望した表現において、「脱構築」は明らかにたんなる起源の探求ではないものとして描かれている。「脱構築」は隠された根源的な場や、未だ考えられていない「根源性」を探すことに還元されはしない。反対に、「脱構築」がそのままの状態で固定され不動化され、語られ構成されうる場とけっして混同されないことを要求しつつ、「脱構築」はあらゆる可能な起源のアポリアを不断に掘り下げる。この意味では、「脱構築」について、エクリチュールによって「脱構築」が生かそうと努め

³³ *Ibid.*, p. 25. [同前、36頁]

³⁴ Derrida, *Apories, op. cit.*, p. 137. [『アポリア』、154頁]

る戯れについては、すでに認められ肯定された、もしくは認められ肯定されうる真理などないのであろう。そのつど、その可能な命名の只中で命名されることのあらゆる可能性から自分を除外することが問題なのだから、「脱構築」がある名に避難先を見出すこともできないのだ³⁵。さて、アポリアをそれ自身として固定し不動化し、述べ形作ることのこの不可能性の極点でこそデリダは、アポリアの動きが生産しうるものを絞り込むあらゆる可能性が不断に解体され、崩壊する還元不可能な代補を「脱構築」に課するのだ。こうして、アポリアは最初の語も最後の語も持たず、最後の手段も目印も持っていない。つねにすでにアポリアは、脱構築においてアポリア化されるものを再専有しえないまま、それ自身の彼方で産み出される。まさに代補として、アポリアは二重であり、二分される。代補の「論理」はつねに同じアポリアに対して働くのだから、このことは驚くべきことではない。ここで『グラマトロジーについて』の重要な箇所を引こう。「代補概念」の中で働く二つの意味作用の「必要であるのと同じく奇妙でもあるような同居」を、デリダが強調し明らかにする箇所である。「代補が付け加わる。それは余剰であり、別の十全さを豊かにする十全さであり、現前の最高度＝過剰〔*comble*〕である。代補は現前を累積し、蓄積する。このようにして、芸術、テクネー、像、表象、慣習等は自然の代補において到来し、累積というこの機能すべてを豊富に持っている。〔…〕だが、これは代理的代補である。代補は代理するために付け加えられるのだ。何かの〈の代理として〉〔*à-la-place-de*〕介入し、入り込むのである。代補が何かを満たすとしても、それは空白を満たすようにである。代補が表象し、像を形成するとしても、それは代補以前にあった現前の欠如によるのである。代補し代理するものである代補は、補佐であり、代わりを-する二次的な審級なのだ。代理として、たんに現前の実証性に付け加わるだけではなく、いかなる起伏も産み出さない。その位置はある空白の欠如によって構造の中に割り当てられているのだ。記号と委任とによって自らを埋めさせることでしか、どこにおいても、何かが自分自身で自らを満たすことはできないし、成就することはできない。記号はつねに事物自身の代補なのだ」³⁶。

³⁵ Cf. Derrida, « La Différance », in *Marges - de la philosophie, op. cit.*, pp. 28-29. [「差延」、『哲学の余白 上』、73-74頁]

この還元不可能な代補、二重であり二分された代補は『アポリア』の以下の二つの文において見出されうる。哲学史だけでなく、「脱構築」そのものの「潜在性」についての驚くべき二つの文である。「アポリアはそれ自身として黙認されることではない」、そして、「究極のアポリアとは、それ自身としてのアポリアの不可能性である」³⁷。こうして「脱構築」は、自らが産み出す予見不可能性そのものに果敢に身を委ねるのだ。哲学史の地平から切り離されるために、「脱構築」が何を思考に命じ思考に委ねるかを述べるごくわずかな可能性が描かれているのを「脱構築」において見たと思ったときに、そしてまた、究極で最後の——同時に受動的で暴露されており、また「弱く」て「至高ではない」のだとしてもそのような——「能力」として何かを目にしたと思ったそのときに、あたかもデリダが無条件性の、さらに言えば決定不可能性の絶え間なき動きでありつづけるはずのものを前にして、あらゆる保証を我々から奪ってしまうかのようである。「脱構築」、その動きや産出物と、アポリアの「方法」ないし準体系的なアポリア化のプロセスが確立される何らかの「立場」とが混同される可能性を代補は取り除く。アポリアは思考の耐忍〔*endurance*〕として語られることさえできない³⁸。アポリアはいかなる役にも立たないし、手段や目的それ自身として考えられることもできない。アポリアは何らか

³⁶ Derrida, *De la grammatologie*, *op. cit.*, p. 208. [『グラマトロジーについて 下』、8頁]

³⁷ Derrida, *Apories*, *op. cit.*, p. 137. [『アポリア』、153頁]

³⁸ ここでハイデガーとデリダのあいだに練り上げられた相当な距たりを強調せねばならない。それは思考に関するものだ。実際、ハイデガーが耐忍として思考を定義し、さらにとりわけて言えば、未だに思考されていないものの只中で、したがって哲学的伝統の未思考のものに対して、思考の行使を投企する絶え間なき執拗さとして定義したということを我々は知っている。「場」ないし「存在の真理」の「開かれた空間性」として、つまり現前が「現前となること」が展開する場と空間性として解された〈ロゴス〉への自らの所属を、ハイデガーがこの「思考の耐忍」の中に書き入れたことを知っている。すなわち、現-前〔An-wesen〕の現-前性〔An-wesenheit〕である。そして、現前の「現前となること」ないし「存在の空地」の、拡がり開かれた場そのものへの参与としての〈ロゴス〉へのこうした所属においてまさに、ハイデガーは人間に固有な耐忍を位置づけ、それに応答する存在の耐忍を位置づけ、決定責任を負うものを位置づけ、「存在の真理」の展開に対応する守衛ないし夜警を位置づけたのであろう。「存在の真理」へ、あるいはその反対へ向かう思考のこうした耐忍は、人間を「留まるもの」の根源的専有におい

のロゴスにはけっして還元されないし、いかなる場からアポリアがその活力を引き出すのか、アポリアがいかなる可能性に向かうのかが明らかになる「前提条件の議論」に還元されもしないのだ。アポリアは自らの可能性の展開が予見され計画されるあらゆる場を放棄しつづける。あらゆる場、あらゆるトポスを放棄すること。アポリアはつねにすでに場を限定できないし、固有の場を持たず、たんなる非-場所の肯定においては順応し設立されえないのだ。この展開の底なき底において、アポリアは同時にそして一度に、場を持たず、かつあらゆる場においてある。アポリアはある場から別の場へと戯れるが、いかなる場からも要求されず、さらに場なしからも要求されない。したがって、アポリアが規定されるような、割り当てられ、地図に示される場はない——つまり、アポリアがいま何であり、かつて何であり、いずれ何であるかを示しうるような場はない。それはたんに、アポリアがつねにすでに位置の割り当て³⁹、場、局地化の可能性の条件を侵食してきたからではなく、アポリアが「あり」、「かつてあり」、「いずれある」ところを忘却することで、あらゆる位置づけとは別の場へと委ねられつづけるからでもある。ラディカルな内

て、つまり、存在という出来事の思考されていない源泉の根源的専有において位置づける。さて、あらゆるデリダの思考は、存在の歴運的出来事の源泉ないし資源としてのこの根源的な場を解体することにある。したがって、思考されていないものについてのハイデガーの観想を超えて、「思考されていないもの思考不可能なもの」と形容しうるようなものと呼び覚ますことが重要なのだ。それは以下のことを意味するものだ。すなわち、思考されていないものを思考、努力、思考の耐忍へと付加し、添付するようなあらゆる様相性を問いただすこと——そこに再び結びつけられるハイデガーに固有なあらゆるモチーフを問いただすことである。それはまた、古典的で慣習的な構造を肯定することにほかならないものを、これらの様相性とモチーフにおいて見透かせるようにするために——決定、対応としての責任、所属、「現前」の「現前となること」のくり抜きを問い直すことである。この意味で、「存在の真理」を「現前」に結び合わせるというハイデガー固有の挙措は、デリダにとって以下のものにほかならない。つまり、異論のない真理——現前という真理——の優位という特権をもっとも担っているあらゆる要素が宙づりになっているのが再発見されるという出来事への、たんなる暴露へと思考を導き行かせることにほかならない。ここでは、「場の未来」と題された我々の研究を参照させていただく。Zagury-Orly, « L'avenir du lieu », in *Heidegger. Qu'appelle-t-on le lieu ?*, *Les Temps Modernes*, juillet-octobre 2008, no. 650, Paris, Gallimard, pp. 306-320.

³⁹ Derrida, *Apories*, *op. cit.*, p. 47. [『アポリア』、49頁]

在性であることなく、究極の超越が描かれるところであることもなく、アポリアはつねに「それとして」を欠いたまま展開されるのだ。そしてまさしくこの意味でこそ、アポリアは自らが産み出され産み出すものがいかに生じるかをけっして述べることができないのだ。おそらく、それはすでに思考されたものの反復として生じたり、あるいはそうでなかったり、さらに言えば、まったく別の仕方でも生じたりするのである。哲学史はいくらその豊かさの中で展開されようが、自らが自分自身の底の無さに引き立てられているのを理解しようが無駄なのだ。哲学史はいかに自分が産み出されるか、つまり、自分自身に閉じこもっているのか、他者に開かれているのかを知りえないのである。もっとラディカルに言えば、哲学史はこの最後の排他的選言において期待されていた方向とはまったく別の方向へと向かうことが、まったく別の呼び声へと応答することにならないのかどうかを知ることもできないのだ。

こうして、「脱構築」は哲学史の「時代的な」論理に背いている。「脱構築」はある意味で、ヘーゲルが哲学史の「契機」と名付けたものが形成される精神の視点や、もっと言えばハイデガーが「世界概念化の時代」と呼んだものと関係させていた「主導的な問い」の練り上げを、脱構築は忌避するのである。「[...] ある時代へ帰属しているということから、「別のものへと移る」べきであり、そしてそのことで、それ自身の中にあつたあらゆるものから解放されるべきであると結論付けるのは、ばかげたことだろう」。そしてデリダは続ける。「我々がここで粗描する挙措を適切に受け取るためには、新たな仕方でも、「時代」、「時代の閉域」、「歴史的系譜学」といった表現を理解し、まずもって、あらゆる相対主義からそれらを守らなければならない」⁴⁰。

この視点から、「脱構築」はけっして哲学史の洗練として考えられることはないし、逆に、歴史的諸時代の相対主義であると考えられることもない。「脱構築」は哲学史に固有の様々な表明を説明し、正当化することのできる法を立てることはできないのだ。そしてそれは脱構築がまずは、プラトン、さらにはソクラテス以前か

⁴⁰ Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 26. [『グラマトロジーについて 上』、37頁]

ら、フッサールとハイデガーとに至るまでに広がる導きの糸とされているあらゆるものをほどこうと努めているからなのだ。「契機」ないし「時代」が開き閉じられる底を構成しうるあらゆるものを「脱構築」は宙づりにし、くり抜く。「脱構築」は反対に、哲学史が歴史性〔historicité〕や歴運性〔historialité〕なしに、したがって固有の運命性〔désinalité〕なしに展開するということを示している。「脱構築」は歴史の歴史なしを明らかにすることに専心する。言い換えると「脱構築」は、そこで輪郭を描かれる可能な概念性との関係「なしに」歴史が輪郭を描かれるところで思考するのである。だからこそ「脱構築」は哲学史から、その意味と本質から自らを区別しはしないのだ。だが、それらから自らを区別しない一方、脱構築は同時にそこに還元されることの不可能性を強調する。なぜなら歴史において歴史として産み出されるあらゆるものも、同様にその不可能性に引き立てられ、その不可能性に関係づけられるからである。したがって、「脱構築」は哲学史を展開させる一つの立場において与えられはしないのだ。「脱構築」は「源泉」ないし「起源」を示しも前提もしないし、歴史の内容に対して規定される能力を主体に授けたり、存在の歴史性において存在者を要請し要求する力を「運命」に授けたりすることなく作動するのである。「脱構築」は主体が歴史に属しているとか、歴史が主体に属していると考えerわけではない。「脱構築」はすでに、いかにして歴史が、一つの骨組み、展開、発展を前提するものでありながら、そこで展開されるものを消してしまうのかを示すのだ。別の仕方と言えばデリダにとって、歴史は少しも言語という仕方に属してはいないのだ。したがって、歴史生成——一つの同じ解の固有な意味に、哲学的立場の差異をすべて集めることをその本質とする生成——においてそれぞれの哲学的立場がいかにして、なぜ立てられるのかを「脱構築」は示している。そして、可能なものの肯定の次元に含まれ、また、その固有の中心に横たわるものの専有に含まれて、「脱構築」はまさにこの生成を超えるものに開かれており、あらゆる哲学的立場を代補するのである。あたかも、それによってこの歴史生成とそこに積み込まれる哲学的立場とが、それらの無条件の未規定化へと開かれるしかないかのようである。

このようにして、「脱構築」はけっして哲学的立場を二分状態、背理、二律背反として組み上げはしない。「脱構築」は歴史的に、哲学史を再分割するのではない

し、同じものを説明しようとする多様な「流れ」として理解するわけでもない。そうではなくむしろ、つねに事後的に「構造」と呼ばれるものの発展の中で哲学的立場を互いに結び付けているように装うものを際立たせることで、各々の立場のアポリアをそのつど〔歴史的にはなく〕特異的に明らかにしようと努めているのである。「構造」という語はここで、その内部では不在と現前の戯れに従って当該の立場を屈折し入れ替えつづけることしかできないような、還元不可能な複雑性を意味しているであろう。だが、脱構築においてこの語は位置づけを変える。「それにおいて哲学が産み出されるが哲学が考えることのできないもの」⁴¹と述べられている。なぜなら、それは「構造」を考えることとはつねにある代補性を考えることでもあるからである。すなわち、哲学がその中で産み出されるような動きと、同時に、それによって哲学が、自分が考えることのできるものの手前かつ彼方で開かれているものような動きをもつ代補性である。ここで、矛盾であることのないような異他的な——それは脱構築が掘り下げようと骨を折るものなのだが——二つの意味作用を、その関係が間接的であるのと同じく不可欠でありつづけるような二つの意味作用を、代補概念は巻き込むのだ。

——歴史それ自身を時代的な意味作用の中に配置する意味作用、また以下のような展開においてある時代から別の時代に移行させる意味作用。すなわち、ある時代を別の時代の前や後に制定する展開、そして諸々の断絶、変革、危機を記すことで、そしてなにがしかの時代が変革し、なにがしかの別の時代が潜在的であり、またなにがしかの別の時代がいずれ来たるべきものであると宣言することで、諸時代を累積するような展開において時代を移行させる意味作用。

そして同時に、

——あらゆる時代に矛盾のない別の仕方〔という意味作用〕、なにがしかの時代に還元できない追加、したがって、一つ以上の意味作用の力をつねにすでに波及させる過剰さの、制御不可能で回収不可能で不屈の氾濫。

⁴¹ *Ibid.*, p. 238. [同前、51頁。ただし、原文では「哲学」ではなく「形而上学」である。]

代補的な複雑化が加えられなければならないのは何に対してなのか。代補性、つまり、いまだあまりに二項的な仕方では我々が記述してきた動きは、同様にその二者択一からも逃れるのである⁴²。代補性はつねに二者択一の結合において専有されているものの彼方で代補する。そして、対立において考えられる可能性の向こうにそれ自身を超過していくのである。

ここで、時代性のアポリアをめぐる、いくつかの筋道を開こう。第一に、つねに不屈の代補性へと結びつくことで、「脱構築」が異他的な二つの意味作用を一緒にかつ矛盾なく考えなくてはならないのは、以下のことを示すためである。すなわち、(必ず政治的、社会学的、歴史的、等々であるような) 哲学的言説が時代的な文法に訴え、そこに再び結びつけられるような語彙——「時代区分」、「周期」、「紀元」、「年代」あるいは「時期」——に訴えるときにはいつも、そして、それらの語彙が、諸々の価値、徳あるいは惨事(歴史的断絶、変革、変遷、変異、変形、停滞ないし後退、等々)を準自然的に持っているときと解されるときにはいつも、それらを名付けて呼び集めることで何が述べられているのかを知れという命令のようなものが不可避免的に失われてしまうということだ。「危機」という基礎概念——あらゆる批判哲学にとって、したがって諸々の「時代」を区別しようとするあらゆる言説にとっての基礎概念——を具体例としてみよう。しかも、「危機」概念が定義していると称するものの意味と本質とからこの概念を逃れさせるために、そして「危機」概念が立てる時間的地平から、あるいはこの概念を設ける修正可能で変化可能で互換可能な現在からこの概念を引き離すためにそうしてみよう。その解消された地平へと、「否定性の弁証法的で目的論的な規定」⁴³に結びつけられるものへと還元できないようなまったく異なる幅の問いへと「危機」概念を開くことで、それが何であるかを我々に別様に考え直すことをこの現在は命じざるをえない。もしも(既に到来していたり、いずれ到来しうるものであるような)到来するものが、我々が「危機」と呼ぶものの示された配置によって解消されるのだとすれば、どうだろうか。さらに言えば、「危機」という診断は我々に到来するもの前で慎ましく消え

⁴² *Ibid.*, p. 266. [同前、85頁]

⁴³ *Ibid.*, p. 60. [『グラマトロジーについて 上』、85頁]

去るはずではないのか。我々に到来するものを「危機」と名付けることで、我々はずでにその重みと特異性を消してしまっていないだろうか。その本質自身が危機から危機へと交代しあうことであり、そしてつねにすでにそうであったような、そうした時間性において、かつその時間性によって我々に到来するものを消し去ってきたのではないだろうか。そしてもし、我々に到来したものがそうした危機を乗り越えることができなかつたとしたらどうであろうか。もし、意味の源泉ないし必要性として、そしてつねにその志向性の展開を保証された承認として規定されるような「危機」という観念と交代するものとして、歴史を、我々の歴史を考えることで、もはや十分ではないのだとしたらどうであろうか。もし、もはやそれとして名付けられえないほどラディカルな「危機」から到来するものとして、歴史が、我々の今日の歴史が考えられるべきであるとしたらどうであろうか。だとしたらそれでは「危機」とは、そしてその名にふさわしい歴史とは何であろうか。こうしてデリダは「危機」に関して「まったく異なる幅の問い」と我々が名付けたものに、特に『グラマトロジーについて』のソシュールとフッサールに割かれたくだりにおいて取り組んだことになるだろう⁴⁴。

いかなる点で「脱構築」が思考することの根拠を求める思考とならずにいるかを示しながら、デリダは、なぜ哲学史と、したがってその諸立場の歴史とが、単一で一方的・な導きの糸の筋道においてはけっして語られえないであろう絶え間なき代補から流出するのをつねに強調した。ここで、共通分母でも、秩序だっており、かつ組織化するよう張りつめられた糸でもなく、その反対に、歴史の中への特異性の無制約な侵入が重要なのであり、この侵入それ自身が、それを考えるものによってさえ考えられないような別の特異性の無限性を産み出すのである⁴⁵。だからこそ「脱構築」はけっして、意味の目的論的地平に従属させられることがない。それは、哲学史において支配的なこの様相に「脱構築」が抵抗するからではない——このことをデリダは、『グラマトロジーについて』において非常に明快に表現している。すなわち、「それ〔「脱構築」〕は専有に抵抗するわけではない」。なぜなら「脱構築」

⁴⁴ Cf. *Ibid.*, p. 60 sq. [同前、85頁以下]

⁴⁵ Cf. *Ibid.*, p. 95 sq. [同前、128頁以下]

は外的契機に由来する制限を哲学史に課すことはなく、反対に、この歴史の哲学的な立場の各々に「手をつける」のだ。それらの立場がそれ自身として与えられ語られる可能性そのものを「手をつけさせる」ことによって「手をつける」のである⁴⁶。「脱構築」は哲学史における意味の再専有の目的論的地平に抵抗するのではないし、「贈与の存在論」、「固有なものと起源の問い」に抵抗するわけでもないし、ましてや救いと贖いについての多様な問いに立ち向かうのでもない。だが、それは「脱構築」が意味として専有され再専有されつつ、この歴史の支配的モチーフに従属することや、「理性の発展」によって支配されるがままであるということの意味ではない。むしろ、「脱構築」は哲学を成就させるがままにし、「抵抗すること」や「諦めること」によってついに近づくことができないものを探すのだ。したがってこの意味では、「脱構築」は同時に、哲学史それ自身を開くもの、哲学史に関わるもの、哲学史を再び導くものと、哲学史を切り離し、台無しにし、宙づりにし、一つの規定された規定可能な本質に集約することから迂回させるものとを産み出すのだ。こうして、「脱構築」は哲学史においてまったく別の歴史が形をとるのを見出す。それは、永続的に成就の地平なく代補されるところの「否定性」であり、「欲望の彼方の欲望」を考える機会と、「忠実なだけでなく可能な限り厳格に、意味（現前、学、知識）の配分に応答するように、贈与（「持ち札〔*donne*〕」）の配分に応答せよ」という命令とが、そこでおそらく開かれるところの「否定性」に再び関わることにあるような力をもつ一つの「抵抗」の歴史である。それは、「贈与することが何を意味するかを知れ、贈与することを知れ、君が何を欲しいかを知れ、君が与えるときに何を言おうとしているかを知れ、君が贈与するつもりであるものを知れ、いかに贈与を無効にするかを知れ、たとえその参与が贈与による贈与の解体であるとしても参与せよ、エコノミーにその機会を与えよ」⁴⁷、という命令である。

以上の理由で「脱構築」は論証的なあらゆる形式に適用される。さて確かに、この「脱構築」の適用は「抵抗」の形式に類似しうる。だが、この類似を示す前に、この「抵抗」という語において賭け金となっているものを理解しなければならな

⁴⁶ *Ibid.*, p. 206. [『グラマトロジーについて 下』、5頁]

⁴⁷ Derrida, *Donner le temps*, *op. cit.*, p. 47.

い。特に、「脱構築」という語にこの語が添えられる際にはそれを理解せねばならない。「抵抗」という語は今日ある種の正統性、ある威信を享受しており、この威信によって問わず語りにされ、さらに言えば、問われえないものとされている。いかにして、なぜこの語が駆り出され利用されるのかを理解するのがとても難しくなっている状況で、あらゆる人がこの語を発しているように思われる。この語はあまりに頻繁に耳にされる。例えば、「時間は主体の脱構築から到来する!」、さらには、「体系を脱構築することから到来する!」と。それはあたかも、それによって抵抗が宣言され主張されうるような、願望的な企図の「脱構築」、自由な選択肢の「脱構築」、唯々諾々と決められた企画の「脱構築」が存在するかのようである。だがまた確かに、「脱構築」は抵抗するのだ。唯名論、同一的なもの、反民主主義、植民地主義、外国人排斥に対して、あるいは、「脱構築」が「世界ラテン化」さらには「男根-ロゴス中心主義」と名付けるものに対して、「脱構築」は抵抗するのだ。「脱構築」は体系に抵抗する。「脱構築」は独善的なあらゆる諸形式を前に抵抗し、見かけ上の同一性の多様な形式がそこに据え付けられるであろう、これらのあらゆる遺産を不断に問いたですのである。しかし「脱構築」は、自分のやり方で、そして異なるニュアンスにしたがって、他性の倫理に対して抵抗し、流刑者の叙情性と彷徨の詩情とに対して抵抗し、同一性のたんなる裏返しであるような差異に対して抵抗する。したがって、「脱構築」が抵抗するのは先行者より高い地位についているかのように装っている立場を肯定するためではなく、為すべきことからけっして放免されることがなく、この為すべきことを不断に掘り下げ、強調し、先鋭化するような誇張法的な義務という名において「抵抗する」のである。この義務はつねに脱構築の代補において関わっている。それは批判の義務としてではなく、ひとつの為すべきこととしてであり、この為すべきことが方向づけようとするものの現在において、受肉し、創始し、立ち上げるべきものは何もないのだ。それは、現前しうるあらゆる規定と、無罪放免が与えられるあらゆる「状況」とをつねに取り下げる「抵抗」の義務なのである。そして、義務という何らかの出来事を生じさせることを望むなら、この義務はそうしたものでありつづけなければならないのだ。つまりこの義務は、放免されること、もしくは義務の成就を思い描くことの不可能性につねに関わり続けなければならないのだ。こうして、「脱構築」は「抵抗」に抵抗する。なぜなら、この「抵抗」は反論、反駁、異論として現れるからである。「脱

構築」はいかなる点でこの「抵抗」がつねに立場として翻訳されるのかを示すことによって、反論ないし拒絶としての「抵抗」という主張を早くから解体した。なぜなら「脱構築」はなぜ「抵抗」がつねに自らの歴史において体系の永続化でしかなかったのかを明らかにするからである。「脱構築」はつねにその粘り強さ、耐久性、固執をさらにラディカルに改良し、改善し、関わらせるような要素であり続けた。「脱構築」が試みる問いは実のところ二重である。「対立」、「反駁」ないし「異論」という語のもとで歴史によって受け継がれてきた「抵抗」ではない「抵抗」概念はおそらく存在しないのではないだろうか。だが同様に、その歴史によって同化され考えられうるような「抵抗」とは別の「抵抗」概念は存在するはずではないだろうか。ここで、たとえ我々がこれらの二重の問いを、その否定性において不断にある種の肯定を与えもするようただ一つの問いに集約せねばならないとすれば、このように定式化するだろう。もし別の「抵抗」概念が正しく思考されうるためには、この語に関するすべてを廃棄してしまうべきであり、この語のあらゆる概念化、あらゆる言葉遣い、あらゆる翻訳が不可能であることに直面して立ち向かうべきだとすればどうであろうか。

そしてこの举措は、我々の時代であれ別の時代であれ、ある時代に固有なものと理解されることはできない。時代の固有性でも本質でもないものとして、そしてすでにしてあらゆる時代を介し、つねにあらゆる時代に憑りつく举措として、この举措は我々の時代において解されなければならない。そしてそれが意味するのは、いかにして、なぜすべての時代は現在の時代から規定されるのか、そしてこの時代自身の中で語られることの不可能性に関わるものとは何かを、「脱構築」は教えるということだ。なぜなら「脱構築」は、「脱構築」がそこから排除されるものを可能とし、「脱構築」が禁止するものを産み出し、「脱構築」が不可能にするものでさえも可能にするからだ⁴⁸。

こうして「脱構築」は、哲学史との関連において、つねに「否定性」の絶え間なき反復として語られているように思われる。実際「脱構築」は、いかにして哲学史

⁴⁸ *Ibidem.*

が、その可能性の只中で不可能なものを産み出しながら自らを産み出すのかを看破し、明らかにしようと努めている。だがなぜ、「脱構築」はつねに不可能なものの契機として語られるのか。哲学史において、いかにしてその可能性そのものがすでにその不可能性に関わり、引き立てられているかを語らせることで、すでに「脱構築」は語られているのだろうか。いかにしてこの「否定性」の絶え間なき反復を考えるのか。

デリダは、そのすべての帰結を支持しながら問いを提起し、議論の余地なく明白な応答を与えてきた。「なぜこうした語法なのか。なぜこの〔「脱構築」の〕語法は幸運にも、否定の道〔via negativa〕の語法、あるいはあまりに普通に否定神学と呼ばれるものの語法と似ていないのだろうか。否定的な形式（アポリア）という選択肢をいかにして正当化するのか。不可能なものないし実践不可能なものを介して、それにもかかわらず肯定的な仕方ですら告示されるような義務をなおも指し示すために、いかにしてそれを正当化するのか。それは、いかなる対価を払ってでも良心＝潔白意識〔bonne conscience〕を避けるべきだからである。愛想のよい下品さからくる歪んだ口元としての良心＝潔白意識のみならず、端的に、自己意識であることを保証された形式をも避けるべきなのだ。主観的確信としての良心＝潔白意識は、あらゆる担保、あらゆる参与、あらゆる責任ある決定が——もしそんなものがあるとして——招くはずの、絶対的なリスクとは両立不可能なのだ⁴⁹。我々はたっただいま、なぜなら「いかなる対価を払ってでも良心＝潔白意識を避けるべきだから」と読んだ。第一に注意すべきは、この答えが議論の余地なく明白であるとしても、それにもかかわらず、否定性の代補を巻き込み、あるいは再び巻き込んでいる。なぜなら、この答えは以下のことを意味しているからだ。すなわち、とくに「良心＝潔白意識」へと、つまり、そこから、判明できっぱり区別された立場が確固としたものになりうるどころの根拠ないし地盤の確証と確実さへと下落ないし移行するべきではないのだ。だが、この否定性の代補をたんなる限界として翻訳することはできない。その適用で満足しえないような義務——つねに主張され、この義務が命じるものに付け加えられなければならない義務——の要求において、この代

⁴⁹ Derrida, *Apories, op. cit.*, p. 42. [『アポリア』、45頁]

補は限界を乗り越える。この義務、不断に自らを上回り無限に増大する義務は、意味の起源や源泉の保存ないし保護などではなく、むしろ思考可能な意味の規定された地平の中で身をささげるあらゆるものに対する、「際限なき抵抗」の保存ないし保護の義務なのである。こうして、つねに思考されるものと、思考可能なものを思考する可能性において展開されるあらゆるものの彼方と手前への思考不可能な超過において、この義務は思考されるのである。したがって、思考不可能なものが産み出されるところの思考の切迫に、決定不可能なものが現れるところの決定の切迫に、問題化不可能なものが到達するところの問題化の切迫に、この義務は開かれているのだ。

知もプログラムもなく、だが一方で知とプログラムとを否定することもなく、「脱構築」ではないあらゆるもの、「脱構築」であるべきではないあらゆるもの、「脱構築」がそうでありえないあらゆるものを、思考が正当に評価するところに、「脱構築」は書き込まれているのだ。別の仕方では、思考が正当に評価するところである。これこそが「脱構築」のうちで脱構築不可能でありつづけるものなのだ。すなわちそれは、思考されないものの彼方で、おそらく、思考不可能なものとして思考に到来するもの名において、思考可能なものの思考のつねに向こうに超過するような、思考不可能なものを正当に評価することなのだ。

Joseph Cohen et Raphael Zagury-Orly, « On dit de la « déconstruction »… »

Reprinted by permission of J. Cohen and R. Zagury-Orly

訳 = 松葉類 (京都大学博士課程)